

地域で学び、地域と共に歩む松本大学の今。

松本大学学報

sokyu 蒼穹

2016.9 Vol.124



長野県サッカー選手権で準優勝した男子サッカー部 (詳しくはP14をご覧ください)

特集

教育学部学校教育学科

2017年4月開設 P.02

- 松商短期大学部 文部科学省APIに選定 P.04
- 「新県立大学構想の見直しを求める活動」にご支援をいただきました皆様へ P.05
- 「健康経営」推進へ5団体が連携協定 P.06
- 「子どもの居場所」づくり 学生が模索 P.07
- ラート競技部 インカレ団体2連覇達成 P.15 ほか

教育学部 学校教育学科 2017年4月開設

入学定員
80名

取得できる教員免許状
小学校教諭一種 / 特別支援学校教諭一種

※ただし、文部科学省における審査の結果、予定している教職課程の開設時期が変更となる可能性があります。

申請をしていた教育学部学校教育学科の設置が認可され、2017年4月、「地域と共に創る教育の未来」を合言葉に、松本大学に新たな顔が加わることになりました。現在、甲信越地区には、教員養成系学部をもつ私立大学はないため、多くの県内高校生は、関東圏や中京圏に進学せざるを得ませんでした。教育学部を設置することで、教員を目指す高校生の皆さんに新たな進学機会を提供します。

文部科学省に赴いての相談では、「教育学部については原則抑制方針を採られていますか?」と率直に切り出しました。「そんなことはありません。教員養成に真摯に取り組まれる大学・学部を望んでいます。」というやりとりから始まりました。

教育学部新設の場合は学部設置(設置審査)に加え、小学校と特別支援学校の教員養成をうたっていたため、それに対する審査(課程審査)も並行して行われるという、複雑な審査を受けることになったのです。

「学部設置の意義・コンセプトを示す設立趣意書作成」、「養成課程のカリキュラム」、「学生募集の見込み」、「卒業後の進路」、「教員募集」、「校舎建設と設備整備」、「財源問題」など設置に向けての活動は多岐にわたりました。昨年度末の申請書提出までに何度か文科省を訪れましたが、毎回厳しく詳細にわたる要請を宿題として与えられました。忙しさのピークは2~3月頃の申請書提出前と、教員審査への対応を迫られた5月末からの1カ月にありました。それら乗り越えて、この度、無事設置が認可されたわけです。

養成課程についてははまだ審査中ですが、川島一夫学部長予定者をはじめ充実した教育スタッフが揃いましたので、8つの力(「子ども理解力」「授業力」「生徒指導力」「地元力」「地域連携力」「学級運営力」「学校運営力」「自己開拓力」)で示されたディプロマ・ポリシーに沿った実力のある教員を養成しようと意気込んでいます。

松本大学 学長 住吉 廣行



教育学部設置認可申請にあたり、松本市教育長から文部科学省にあてていただいた文章がございますのでこの場を借りてご紹介いたします。

平成28年2月25日
文部科学大臣様

松本大学教育学部の新設について (要請)

松本市教育委員会 教育長 赤羽 郁夫

このたび、松本大学が平成29年度に教育学部学校教育学科を新設するために、設置認可申請を行う予定であるとして伺っております。

地方創生が喫緊の課題となっている現在、次代を担い、地域に定着して活躍する人材の育成において、高等教育機関の役割は益々その重要性を増しています。しかし、本市においては、大学進学者のほとんどが県外に流出するという状況のなか、卒業後再び地元に戻って地域づくりを担っていく人材を今後も確保していくことは大変難しい状況にあります。

特に、教員養成系の学部は、県北部の長野市にある1校のみがその役割を担っているため、県の中部にある本市からの進学者は

少なく、多くが県外の教員養成系大学に進学しているのが実情です。本市ばかりでなく、県の中部・南部の市町村の状況も同様です。

こうした現状の中、今回の松本大学教育学部学校教育学科の設置構想は、本市の教員養成系大学への進学希望者のみならず、県中部・南部の希望者の要望にも応え得るものであり、歓迎すべきものと考えております。

松本大学は開校以来、地域と共にある大学を目指して、学生が積極的に地域に出かけ、地域住民との交流活動等を通して確実に地域貢献に寄与してきた実績があります。

このたび、その実績を基盤にして教員養成に取り組むことは、地域に根ざした活動に

意欲的に参画する教員の育成に寄与するものであり、地域を愛する次代の子どもの育成においても大いに期待できるものと考えております。

地元教育委員会としましても、教員養成課程における教育実習や子どもたちとの日常的な交流等を通して、地域や子どもたちの願いに応える教師としての使命感や資質を高められるよう、校長会等と連携して協力を体制を整えていく所存です。

つきましては、松本大学より教育学部学校教育学科の設置認可申請が提出されました際には、特段のご高配を賜りますようお願い申し上げます。

これからの教員に求められるのは、 「教えるチカラ」プラス「育てるチカラ」。

教員採用試験に向けた支援体制

松本大学 教育学部ならではの「成功に導く5つの特長」

育てるチカラ



教員に必要な
「人間力」を得る

【インターンシップ・学校ボランティア科目】
現場での経験や体験が
教員採用試験の
面接や小論文に活きる

教えるチカラ



教員に必要な
「知識・技能」を得る

【学年別少人数ゼミナール】
教員採用試験の筆記試験に
必要な知識の獲得

1. 学校現場で臨場感を持って学ぶ

松本大学の基本理念である「地域貢献」のもと、一年次から学校現場での学びを体験します。

2. やる気を引き出す『授業力』

参加型授業（アクティブ・ラーニング）で子どもたちの答えや思考過程を、クラス全体の深い理解に活かす『授業力』を培います。

3. 学外授業で教員としての幅を広げる

多様な学外活動を体験することで、教員としての基礎力とコミュニケーション能力を身につけます。

4. 充実した支援体制

3つの支援センターが窓口となり、教員になるための実践活動を強力にバックアップします。

●学校インターンシップ支援センター ●教育実習支援センター ●教職受験対策支援センター

5. 心理学関連科目の充実

子どものこころに寄り添うスキルを学びます。

●心理学概論 ●対人関係の心理学 ●教育心理学 ●発達心理学
●学校心理学 ●認知心理学 ●臨床心理学 ●カウンセリング入門

ろう学校の生徒と交流し理解深める

7月22日に松本ろう学校高等部の生徒13名、教職員12名の皆さんと、スポーツ健康学科の学生との交流会を開きました。スポーツ健康学科卒業生の小林(旧姓竹内)奈緒先生からの『ろう学校の生徒に大学生活を体験させたい』という依頼に、犬飼・岩間両教員が呼応し今年で2回目です。ろう学校の生徒がリードした「爆弾ゲーム」や「震源地ゲーム」、大学の備品や

学生の指導力を活用したバブルサッカーやミニ卓球、ラートなど、2時間余の楽しい時間はあっという間に過ぎました。

障がいがある生徒の指導ということで、最初はどうすればよいのかわからず戸惑いを隠せなかった学生も、同じ時間や空間を共有しながら、障がいの有無ではなく同じ人として関わることを体験的に理解できたのではないかと思います。新



設される教育学部で特別支援学校教諭の養成も始まりますが、すでに大学としてのベースはこのようにできています。

(スポーツ健康学科・教授 岩間 英明)

2017年度 入試概要

詳しくは、松本大学入試情報サイト「募集要項」でご確認ください。
▶ www.matsumoto-u.ac.jp/admissions/

アドミッション・ポリシー 本学部が期待する次の①～⑦の姿勢の内、①～③をすべて満たし、④～⑦の少なくとも1つ以上を満たしていること。

- ① 子どもの人格形成に大きな影響を及ぼす存在になるという自覚を持った人
 - ② 子どもが好きで、子どもに寄り添いながらその成長を願う心を持った人
 - ③ 子どもの教育に必要な知識、技能、表現力を積極的に身につけようとする人
 - ④ 自ら課題設定ができ、その解決に向けて前向きに努力しようとする人
 - ⑤ 幅広い分野に興味・関心を持ち、絶えず自身の許容量を広げようとする人
 - ⑥ 教育現場の教職員、保護者を含む地域の方々との連携を重視し、協働できる人
 - ⑦ 同僚との協力を強め、地域の教育の質向上に向けて絶えず努力できる人
- たとえ入学前には満たしていない項目があっても、大学で学ぶ間に身につけていくことを望みます。

入試の種類

推薦入試(前期・後期) / AO入試 / 一般入試スカラシップ / 一般入試 / 大学入試センター試験利用スカラシップ / 大学入試センター試験利用入試
※スカラシップ入試とは、合格者の授業料が国立大学並みに免除される入試制度です。

学費

【初年度学費】 入学金 250,000円 / 授業料800,000円 / 施設費280,000円……………初年度合計 1,330,000円

【スカラシップ入試合格者】 入学金 250,000円 / 授業料400,000円 / 施設費100,000円 ……初年度合計 750,000円

参考：平成27年度国立大学標準額 入学金 282,000円 / 授業料 535,800円 / 初年度合計 817,800円

松商短大が県内初 文科省APに選定 学修成果を客観的に評価する仕組み構築

松本大学松商短期大学部はこのたび、文部科学省の補助金事業「大学教育再生加速プログラム」(AP)に選定されました。平成26年度からスタートした本プログラムに選定されたのは、長野県内の大学・短大で本学がはじめてです。

松商短期大学部・学部長 糸井 重夫

企業活動のグローバル化、成熟社会への移行、少子高齢化の進展、限界集落の増加や地域崩壊など、今日の日本社会を取り巻く環境は大きく変化してきています。特に、日本経済が先進国経済に転換したのに伴って、高等教育においても発想力や創造力などの新しい“もの”を生み出す能力が重視され、「何を習ったのか」ではなく「何を身に付け、何ができるようになったのか」を学生本人に認識させ、修得した知識や技能を活用して新たな価値を生み出す、知識基盤社会における21世紀型市民を育成する教育が求められるようになりました。

このような認識の下、本学では、従来の知識を中心に評価する「成績表」に加えて、個々の学生の技術や能力(コンピテンス)を中心に評価する「ディプロマ・サプリメント」(学位証書補足資料)を発行することにしました。

欧州では、学生のコミュニケーション能力やチームで働く力など個々の学生のパフォー

マンスを評価するために、学位を補足する説明資料として「ディプロマ・サプリメント」の発行を進めています。その背景には、社会がグローバル化し、国籍とは関係なく優秀な学生を獲得したい企業が多くなったことにより、様々な国の学生の情報、それもその企業が必要とする労働力の質に関する技術や能力などの情報が求められたことがあります。つまり、出身国が異なる学生の労働力としての質の比較可能性を高めたいという意図がありました。たとえば、日本の企業が世界から優秀な人材を得ようとした場合、学生の出身大学の特徴が分からず教育評価も国ごとにバラバラで成績証明書しかなければ、学生の労働力としての比較が難しく、一人ひとり成績表には表れないコンピテンスに関する情報を得る必要があるわけです。

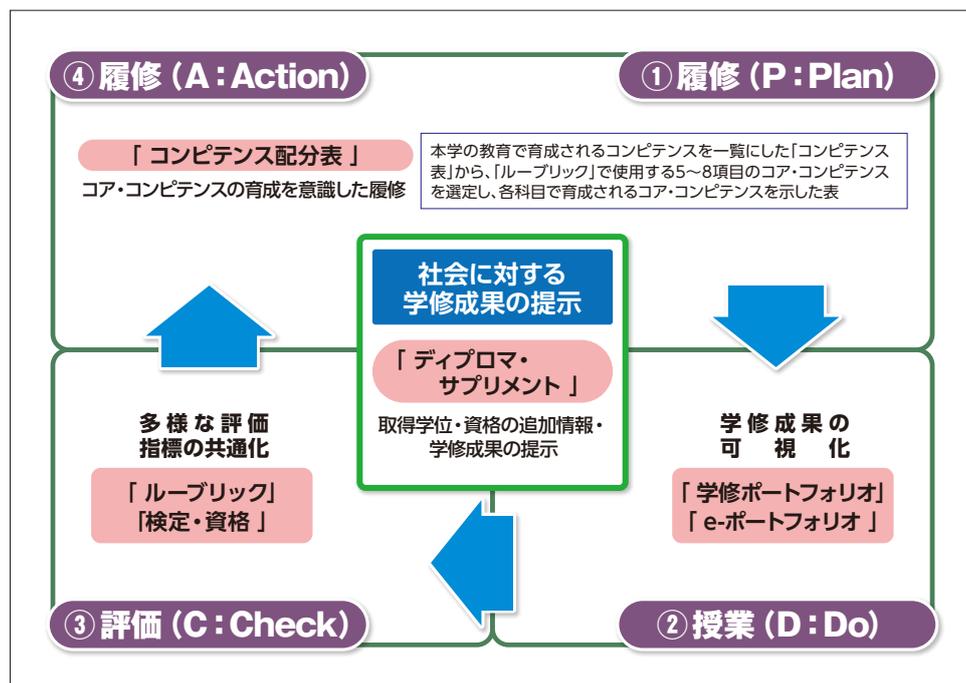
このような欧州での取り組みを参考に、本学では、学生のコンピテンスを最大限引き出すために現在の2学期制を徐々に4学期制に移行させ、育成されたコンピテン

APとは…

文部科学省「大学教育再生加速プログラム」(AP:アクセラレーション・プログラム)。大学、短期大学及び高等専門学校が行う教育改革を一層推進するため、教育再生実行会議などで示された新たな方向性に合致した先進的な取り組みとして選定された事業に対し必要な経費を補助し、国の高等教育の活性化及び高度な人材育成に資することを目的とする。今年度の全選定校数は19校(大学15、短大3、高専1)。

を評価する仕組みを開発するとともに、地域社会に対して成績表には表れない個々の学生のコンピテンスを「ディプロマ・サプリメント」として発行することにしました。企業側は学生間の労働力の質としての比較可能性を高め、学生側は自分をよりよく理解してもらう有用な情報の提供が可能になると考えています。

左記の図は文部科学省に申請した際の「取組概念図」ですが、当該科目で育成されるコア・コンピテンスを考慮してアカデミック・アドバイザーである教員が「コンピテンス配分表」により履修相談に応じ、各コンピテンスを「ルーブリック」(学習到達度を評価項目とレベルで表形式に表したものを)を活用して評価することで、本取り組みは、意識的にコンピテンスを高めていく学生の主体的な学修を促すようになっています。そして、学修成果を「学修ポートフォリオ」「e-ポートフォリオ」に蓄積することで振り返りによる知識の定着を図るとともに、卒業時に本学での学修の集大成としての「ディプロマ・サプリメント」を発行します。



「新県立大学構想の見直しを求める活動」にご支援をいただきました皆様へ

学校法人 松商学園 理事長 片倉 康行
松本大学 学長 住吉 廣行

署名に掲げた要望に対する長野県の対応

「新県立大学の構想の見直しを求める活動」に対しましては、ご署名をはじめ温かいご支援を賜り誠にありがとうございました。

その後、長野県当局も皆様のご支援を背景とした松本大学の要望を真摯に受け止められ、次のように対応いただきました。

1. 新県立大学の「総合マネジメント学部」が全国的にみても数少ない松本大学の「総合経営学部」と名称が重なるため、学部名称の変更を要望し、その結果「グローバルマネジメント学部」に変更がなされました。
2. 長野県内に県の高等教育を司る専門の部署を創設していただきたい旨の要望に対し、「県民文化部 私学・高等教育課」が開設され、更に「高等教育支援センター」も設置され、今後県下の国公立私立大学を含む高等教育の在り方についても、胸襟を開いて話しあえるようになりました。
3. 管理栄養士養成課程の設置については、再検討の要望は受け入れていただくことは叶いませんでした。

しかし、これ以外にも長野県には多くのご支援をいただきました。その一つが、教育学部の設置認可申請に必須の「高校生に対する進路意向アンケート調査」に際し、県教育委員会や関連部署から多大なご協力をいただいたことです。

長野県と協調し、松本大学の持つポテンシャルを 県内高等教育発展に活かす方向へ転換

この間、全国的に大学を取り巻く環境が急速に変化し、各大学がその変化への対応を怠ると厳しい状況に陥るという状況になってきました。こうした状況から今までの県との距離を置いた関係から、お互いに協力し高等教育発展のために本学が持つ教育資源を活かすという未来志向に転じ、本学も県全体も共に発展できるよう対応すべきと考えております。

そこで今回、このような考え方・意向を長野県知事に伝え、これまでの様々な対応にお礼を述べ、ご苦勞をおかけした点については十分に理解しつつ、今後は協調した関係で長野県高等教育の発展に貢献したい旨をお伝えしたいと、本学から懇談の場の設定をお願いし、去る7月26日に実現した次第です。

ご署名をいただきました皆様方への御礼

新県立大学の構想に対し、11万人を超える皆様の声には大きな力をいただきました。本学だけの要望では実現できなかった課題も多く、皆様のお力添えがあったからこそと、改めて深く感謝申し上げます。

今後、松本大学の管理栄養士養成課程では、県立大学が設置されても、学生募集等に影響が無かったと言える結果を目指して努力して参ります。同時に、教育学部の新設、既存学部・学科の内部改革を確実に遂行することにより、県内高等教育がどのように変化しても対応できる柔軟性も兼ね備えた大学として、その存在感を発揮できるよう努めて参ります。

引き続き、皆様の温かいご支援をよろしくお願い申し上げます。

「子どもの居場所」づくり 学生が模索

観光ホスピタリティ学科・教授 尻無浜 博幸

7月下旬、小中学生の夏休みの始まりに合わせて「子どもの居場所」が、松本市内にモデル的に開設されました。この居場所づくりにおける学習支援の部分に、松本大学の学生が加わりました。簡単に言えば、「夏休みの宿題を学生が面倒みますよ」というフレームですが、ここに加わることができた理由は、宮城県石巻市での災害支援活動として、現地の大街道小学校で学習支援を継続している経験（蓄積）が評価されたことと推察します。

小中学校の夏休みが終わる9月以降も定期的にこの居場所は開設される計画に

なっています。つまり当初よりある一定の長い期間を想定しての取り組みがこの夏に開始されたわけです。

この背景には、子どもの生活の変化があります。「一人で留守番」、「一人で食事」という環境に置かれている子どもは実は少なくありません。この取り組み自体、夏休みをきっかけに、自宅以外に居場所を一箇所つくることのできないかとの模索です。ある地域の自治会からの声が基盤となって始まりました。特徴は、活動支援機能（団体）と地域の町会との連携で場所が設定されていることです。子どもとどう関わるかという観点と、子どもの環境をどう地域で構築できるかという観点の二つがあることです。



「子ども居場所」づくりのための勉強会に参加

松本大学の学生は、8月9月の夏季休暇中に14名が参加し、2名～3名ずつ5チームを結成して順番制で対応しました。もちろん、メインは子どもの宿題をみることで、子どもと一緒に宿題をしながら、話をし、その子どもの生活の情報をつかんでいくことが大切です。多くの学生が関わることで多くの話を聞くことができます。また深い話になっていくこともできます。この情報を常に居場所づくりに活かす考えです。従って、参加する学生は社会福祉を主に学んでいる学生が多く、子どもとの時間は毎回、発見が多いようです。

この夏に始まったばかりの学生の学習支援活動ですが、石巻での活動を通じて学んだように、またこの活動での学びは多いものになるでしょう。



子どもの宿題をみる学生たち

「おいでよ♪ 松大健康教室」で学修成果を発表

健康栄養学科 学科長・教授 廣田 直子

7月16日に「おいでよ♪ 松大健康教室」を開催しました。健康栄養学科3年前期の授業「栄養教育実習」の最後に、毎年少しずつ形を変えて実施している取り組みです。A・Bの2クラスが合同で実施するため土曜日に設定しました。大学のホームページほか、地域の回覧板、ラジオ・新聞等のマスメディアによる広報の立案も学生たちの学習と位置

付けています。今年は3年生の保護者の皆様にも案内を送付し、当日お越しくださったご家族もあって、たいへんうれしいことでした。

A・B合わせて12の各チームが、2か月前から対象となるライフステージを決め、幼児期・学童期から高齢期までそれぞれに合わせたテーマを設定し、準備を進めてきました。プランニング、教材づくりを進め、リハーサルでは学生同士が意見を出し合い、より良い発表をめざそうとする姿がみられました。連携協定を結んでいる（公財）長野県健康づくり事業団の健康運動指導士と管理栄養士の皆様にもご協力いただきました。



本年度は、本学で実施される「まつもと広域ものづくりフェア」に合わせたためか、事前申し込み者の倍近い70余名が参加してくださいました。学生の事後評価では各自が課題を見出した様子ですが、当日はリハーサルのときよりもブラッシュアップされた発表が多く見られました。この機会に得たものを今後の学修に活かしてほしいと思います。

ご協力くださる学内外の皆様と、地域の皆様の参加があってこそこの学びの場です。学生を温かく、ときに厳しくご支援いただく皆様には、心から感謝申し上げます。



山田研究室院生・学生の研究成果 英文誌に掲載

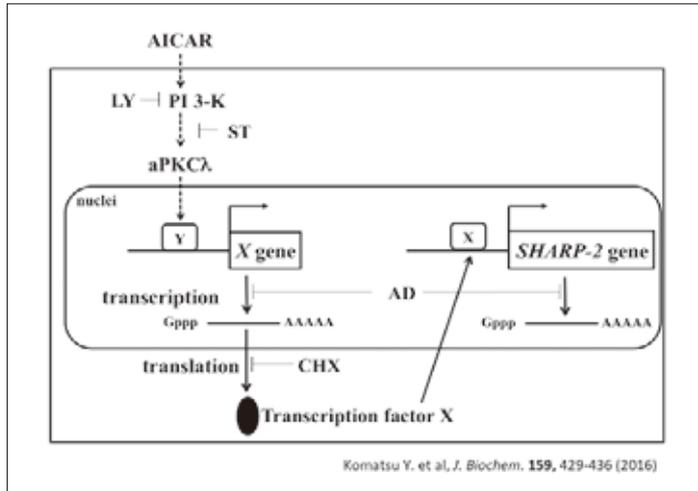
大学院健康科学研究科・教授 山田 一哉

このたび、私の研究室の学部2～4期生と大学院2～4期生が携わってきた研究の成果が日本生化学会の国際誌であるJournal of Biochemistry 誌に掲載されました。教員同士の共同研究等では、過去に多くの国際誌・国内誌での掲載がありましたが、学部生・大学院生が出したデータを

もとにしたものは、今回がはじめてです。

内容は、インスリンによる血糖低下に関与する SHARP-2 という遺伝子のはたらきが、血糖低下作用をもつ AICAR という物質によって増強されること、および、そのしくみについてです。私たちの仮説通りに肝臓系の細胞でAICARはSHARP-2遺伝子の

はたらきを増強しました。しかし、そのしくみが従来いわれているAMPKという酵素の経路ではなく、PI 3-K/aPKCλという全く別の酵素の経路によることを証明したものです。



私達分野では、1つの論文を審査するために通常審査員が2～3名つきます。論文内容に関して審査員がもつ疑義を一つ一つ晴らしながら、全員を説得してはじめてその専門誌で論文が掲載されるというプロセスを経ます。今回のような従来いわれていることを否定する内容の研究は、なかなか審査員の理解を得ることが容易ではなく、全く新しい発見の報告よりも掲載に至るまでエネルギーを要することもあります。それでも、関与した学生・院生の研究が適切であったため、無事に掲載に至ることができました。数年かけて複数の人たちが情熱を持って取り組んできた研究が日の目を見たので、指導者として喜びを感じるとともに、責任を果たせたことで少し安堵もしています。

一方で、今年度も長野県科学振興会の科学研究費助成金に、私の研究室の大学院生の三島歩実さんの「SHARP-2とATBF1との相互作用の解析」と花岡由紀奈さんの「SHARP-2はインスリン遺伝子の転写に関与するか」の2件が採択されました。これらの研究成果についても近い将来に掲載できることを期待しています。

研究の魅力を高校生にわかりやすく伝授 「自分の遺伝子型を調べてみよう」実験教室開催

大学院健康科学研究科・教授 高木 勝広

8月27日に、「自分の遺伝子型を調べてみよう～2016～」実験教室を開催しました。この実験教室は、大学で取り組んでいる科学研究費助成事業による研究を高校生等に分かりやすく発信する取り組みで、日本学術振興会が大学等の研究機関と協力して開催しており、「ひらめき☆ときめきサイエンス」と呼ばれています。

松本大学では今年で9回目の開催となりますが、実施責任者を山田一哉教授から引き継いだ最初の実験教室でした。参加者は高校生6名で、日本学術振興会の方も見学に来られました。

実験は、参加者の唾液からDNAを抽出して、「お酒に強いか、弱いか」「太りやすいかどうか」「短距離型筋肉か長距離型筋肉か」に関わる遺伝子一つを選んで、自身の遺伝子型をタイピングするという内容で

す。参加者の多くは初めて実験を行う人ばかりで、最初は緊張しているようでしたが、基本的な実験機器の扱い方の説明を受けた後いよいよ実験開始となりました。見知らぬ液体を入れたり、混ぜたりと表情は真剣そのもの。自身のDNAが糸くずのような形となって溶液に出現したときは目を輝かせながら大いに盛り上がり、また遺伝子型がわかった際には、それぞれが一喜一憂しながら、得られた結果をしっかりと受け止めていたように感じました。ティーチングアシスタントとして学生たちが参加者の傍らにいたので、実験の相談を受

けながら終始和やかな雰囲気の中で実験を進めていくことができました。

参加者の声の一部を紹介します。「とてもおもしろいプログラムだったが、自分がお酒に弱いことが科学的に証明されてしまい飲み会などの夢がたれた…。それでも充実した一日でした!」実験は非常に興味のある内容でしたのであつという間でした。分からないところは先輩方が丁寧に教えてくれたので分かりやすかったです。」

これからも高校生たちの夢を広げる本プログラムを推し進めていきたいと思ひます。



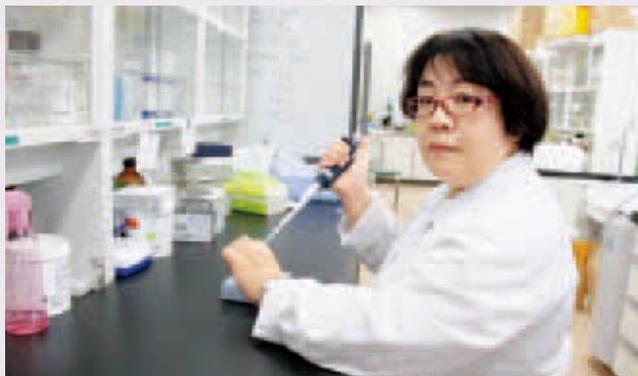
研究室紹介

健康栄養学科 専任講師
沖嶋 直子

アレルギーに関する研究 「他人事」ではなく「自分事」で

私の研究室では、アレルギー患者の支援に役立つ研究を行っています。これまでに、卒業研究の一環で、食物アレルギーの子どものための除去食メニュー考案と、家庭での調理操作でアレルギーが混入する要因を実験的に調べました。その結果、粉類はふるうなどの操作で簡単に舞い上がり混入する事、調理する人の手指にアレルギーがついて、その手で別の食材を触る事でアレルギーが混入する可能性がある事が分かりました。現在では、災害時に食物アレルギー患者が安心して食事ができるよう、パッキングの活用を模索しています。その他、花粉症の人が果物を食べると口やのどがかゆくなる口腔アレルギー症候群についても、果物をサンプルとして研究を始めました。

大学院時代に免疫やアレルギーに関して研究していたので素地はありましたが、本格的にアレルギー研究へ舵を切ったのは、自分自身のアレルギーが酷くなったこの5年ほどです。小学生の頃は蕁麻疹と喘息に悩まされていましたが、20歳を過ぎたら嘘のように体調が良くなりました。ところが、毎日のように光化学スモッグ注意報が出ていた東京都心に住んでいたときは何ともなかったのに、環境の良いはずの松本へ転居してきたら、来た年の秋以降、夜になると毎日顔中に蕁麻疹が出るようになり、翌年春先に喘息が再発。その後、昨年に



単にアレルギーの人が食べられるメニューを考案するだけでなく、それが安全かどうかを実験的に調査

はアレルギー性鼻炎まで発症し、検査の結果、ハウスダストとダニがアレルギーである事が判明しました。忙しくなると「人間はホコリでは死なない。」と言い聞かせ掃除をさぼっていましたが、「人間はホコリで死ぬこともある。」のだと反省し、今では「吸引力の違う」掃除機で自宅と研究室の掃除をする日々です。

自分にもアレルギーがある事で「他人事」ではなく「自分事」として研究や患者支援に携われます。アレルギーは不愉快な症状も多いですが、私にとってはアレルギーがGiftedなのだと思うようになりました。今後も患者の視点から、アレルギー研究を進めていきたいと考えています。

徳島大学大学院栄養学研究科博士後期課程修了。徳島大学医学部助手、アプライドバイオシステムズジャパン(株)を経て現職。栄養学博士。【専門分野】分子栄養学【研究課題】食物アレルギーの患者支援に関わる基礎研究/食品への組換え遺伝子混入検査

夏の大阪バリアフリー&ユニバーサルデザイン研修

松商短期大学部 准教授 廣瀬 豊

キャンパスを飛び出し
地域で学ぶ!

out campus study

アウトキャンパス・スタディ

バリアフリーやユニバーサルデザイン(UD)を学ぶ廣瀬ゼミナールの学生たちが、7月に「ユニバーサルマナー検定3級」を取得しました。ユニバーサルマナーとは、高齢者や障害のある方、ベビーカー利用者、外国人などの多様な方々に対して、「その方々の視点に立って行動する」ための「こころづかい」の一つです。車いすユーザーを見かけたとき、何かしたいが「何をして良いかわからない」そんな時に、どう行動するか、どの様に声をかけるかなどのささやかな配慮を学びました。このユニバーサルマナー検定はユニバーサル・スタジオ・ジャパン(USJ)の社員向け研修から発展したと言われています。

9月1、2日に実施したアウトキャンパス・スタディでは、USJのバリアフリーやユニバーサルデザイン・サービスの現場見学を



目的としました。1日目は、日本最大級の福祉用具の常設展示場ATCエイジレスセンターを視察しました。食器などの身近なものから、車いす、入浴用品、排泄関連用具、UD商品、自動車などが展示されています。ガイド役の職員の説明を受けながら、各ブースをまわったり実際に体験したりしまし

た。普段使うことのない車いすは、ちょっとした段差やグレーチング(排水路にかける格子状の蓋)の隙間がバリア(障壁)となり、動けなくなることを実感しました。

2日目は、USJを視察しました。ゲストサービスカウンターには、車いす利用者や視覚に障害のある方などが相談に訪れていました。設備面でもバリアフリーの工夫がされており、クルーの方々の目線や声のトーンなどに「こころづかい」を感じることができました。設備はすべてバリアフリーではありませんが、スタッフが「ソフト面」で対応しており、これは今すぐできるUDだと改めて感じました。1日目に学生が車いすです苦勞していた「グレーチング」は、USJでは車いすやベビーカー対応のものをしっかり取り入れていました。

本学の国際交流活動 さらに充実

現在、国が進めている「大学のグローバル化の推進」は、日本の国際的な産業競争力の向上を進めるために、世界のグローバルな舞台に積極的に挑戦して活躍できる人材の育成を図ることを目的としています。

松本大学でも現在、海外に興味を持ち、海外研修や語学プログラムに参加する学生が増えています。今夏はオーストラリアのニューカッスル大学やアメリカのノートルダム大学での短期プログラム、また、中国の嶺南師範学院や韓国の済州大学でのサマーキャンプに多くの学生が参加しました。さらに、中国と韓国からの交換留学生も本学で勉学に励むとともに、松本大学の学生とも交流を深めています。今後も本学のグローバル化を推進するとともに、安全に配慮しながら貴重な学生生活の時間をさらに有意義なものにすべく、サポートをしていきたいと考えております。今夏に行われたさまざまな取り組みの中から、本学が開催した短期日本語プログラムの様子をご紹介します。



互いの文化に触れ交流深める 松本大学「短期日本語プログラム」を実施

松本大学では7月26日から8月8日までの2週間、「短期日本語プログラム」を開催しました。年2回、夏と冬に行っているもので、夏の開催は今年で2回目となりました。今回は中国の嶺南師範学院から2名、そして初めてアメリカのニューヨーク市立大学ラガーディア校から4名の計6名が参加し

ました。

このプログラムでは、普段海外で日本語を学んでいる学生が松本を訪れて日本語の学習をさらに進めるとともに、日本文化に触れ、本学の学生と交流を行います。その中で日本への愛着を深めていただくとともに、本学の学生にとっても海外の学生と交流を持つ貴重な経験の場となっています。

日本に到着した参加者は、はじめは緊張して、日本語での会話もなかなか進まない学生もいました。しかしながら「日本に滞在している間に日本のさまざまな

文化を体験し、多くの友達をつくりたい」と積極的にプログラムに参加し、日本語能力も向上しました。初めて経験するそば打ちや温泉、茶道など最初は戸惑ったものの、温泉では裸同士の付き合いを楽しみ、また、茶道では長時間の正座に四苦八苦しましたが、最後には泡いっぱいのできる抹茶を点てることができました。

松本城では日本最古の現存するお城の歴史を興味深く学び、縄手通りや中町の風情ある街並みを楽しみながら、町中に設置されている井戸の水で喉を潤していました。ほかにも初めて食べる馬刺しやもんじゃ焼などにも挑戦しました。最終日には、松本大学連の一員として学生とともに松本ぼんぼんに参加して最後まで踊りとおし、松本の暑い夏を十分に楽しみました。

文化や言葉が違って、その違いを尊重して体験することの大切さを海外の学生から本学の学生が逆に教わった、貴重な国際交流の場となりました。

(国際交流センター 関澤 一洋)



グローバルキッズセミナー大成功!

短期日本語プログラムに合わせて8月5日、「体験型グローバルキッズセミナー」を開催しました。源池小学校の児童4名と短期プログラム参加者6名、さらに嶺南師範学院から本学に1年間留学している学生2名と、本学の教職員を含め計16名が参加しました。

まず、楽しいゲームで緊張気味だった子ども達も一気に笑顔となり、留学生と共に和やかな雰囲気に包まれました。続いて、

セミナー担当のジャスティン先生(松商短期大学部非常勤講師)のワークショップでは、グループごとに模造紙に絵を描き、子ども達と留学生による班ごとに完成作品の発表が行なわれました。

絵を通じて楽しく交流し、お互いの国の言語を教えてもらいながら皆の前で発表するという体験をした子ども達。フェアウェルパーティーにも参加し、きっと



心もお腹も満たされて、家庭では会話の花が咲いたことと思います。

(スポーツ健康学科・教授 中島 弘毅)

地域の健康づくりを支援する 地域健康支援ステーション



地域健康支援ステーションでは、地域からの依頼を受けて健康づくりの支援やメニュー提案など実践的な活動を行っています。最近の活動をご紹介します。

管理栄養士スタッフ 飯澤 裕美
健康運動指導士スタッフ 赤津 恵子

岡谷市食育講演会で 講演を行いました

岡谷市からの依頼を受け、食育月間中の6月21日に同市食育講演会で「地域とともに考える!食する力を育もう」と題して講演を行いました。この講演会は栄養士会、食生活改善推進員、農業団体、保育所関係者、学校給食関係者など様々な立場で食育を実践されている方の研修を兼ねて開催されたものです。



食生活が多様化している現状、県や市の食育計画で掲げた目標、当ステーションの活動を通して感じたことなどを伝え、地域で食育活動をする場合、何が課題で何をめざしていけばいいのか提案させていただきました。

講演後のグループワークでは、子ども世代の食経験の充実や高齢者世代への食生活支援など、食育を推進している方がそれぞれの立場で遭遇した具体的な事例や思いを示しながら、熱心に話し合う姿が見られました。

このような機会を重ねることが、食育推進のためのソーシャルキャピタルを醸成し、地域のつながりや人と人とのつながりを活用できる身近な食育活動へと発展させていくことになると考えられます。

「パッククッキング」を 体験していただきました

松本大学を会場に7月16日に開催された「まつもと広域ものづくりフェア」において、災害時の食支援をテーマにした「パッククッキング」体験コーナーを設けました。健康栄養学科沖嶋ゼミナールの協力のもと、長野県栄養士会中信支部と合同で実施しました。



切った野菜と調味料をポリ袋に入れて揉みほぐすだけ、という簡単な作業に子どもたちは大はしゃぎです。袋の口をきつく結び、沸騰した大なべに入れて茹でます。盛り付けは袋から取り出すだけで、「ごはん」「カレー」「オムレツ」がきれいに並び、参加した親子で試食しました。

「パッククッキング」は水の使用が制限される災害時やキャンプ時に活用できる料理法で、いろいろな場面で応用が可能です。沖嶋ゼミでは食物アレルギー患者の除去食への応用の研究も進められています。参加者からは「小さい子どもでも安心して一緒に料理できる」「子どもの夏休みの研究で取り組みたい」などの感想も聞かれました。

「地域課題研究」の授業で 現場実習を担当しました

全学部共通科目「地域課題研究B」担当の廣田直子教授からの依頼で、受講している学生に、地域で行われている運動教室のサポートを通して、住民の健康づくりがどのように進められているか実際に体験してもらいました。



要支援要介護状態をなるべく遠ざけることは、今、優先して取り組む課題となっております。どの地域でも運動による健康づくり教室

が盛んに開催されています。学生は事前に、運動がいかに健康づくりに大切かを学ぶとともに、ロコモ度テストの方法も体得しました。

7月3日、塩尻市が実施した住民15名が速歩を習得する講座に学生が参加し、体力アップに適した歩く速さを割り出すサポートをしました。参加者とペアになり、早歩き後の脈拍、距離を記録しました。現場学習後の講義の中で、廣田教授の指導のもと振り返りを行いました。学生は日々健康づくりを目指す住民に良い刺激を受け、また老いや健康関連の諸課題を身近な問題と捉えることができ、学びを深めたことと思います。

登山グループの方の 体力測定を学生と実施しました

登山愛好者の会から、登山の参考にしたので体力測定をしてほしいとの依頼を受け、8月8日、本学においてスポーツ健康学科生6名の協力を得て同会員9名の体力測定を行いました。握力や柔軟性といった一般的な測定のほかに、大学の専門的な機器を使った体力測定を実施しました。学生たちは参加者とコミュニケーションを図り、最大の力が発揮できるように励みながら測定のサポートをしました。

測定後は、各自の弱点箇所を強化する筋トレの方法を紹介し、実践していただきました。参加者からは、「テキパキと働く学生に感心したり励ましに感激したり大変楽しいひとときだった」、「思ったより筋力がなかった」、「毎年1回は実施したい」との声をいただきました。



皆さまのお近くで、学生や専門スタッフ(管理栄養士・健康運動指導士)が
お手伝いできることがありましたら、是非お声をかけてください。



話と和と輪、想像と創造の空間 地域づくり考房『ゆめ』



地域づくり考房『ゆめ』は、学生が大学での学びを活かして地域と連携し、課題解決に向けて主体的に活動することを支援しています。主に4つの取り組み（①学生の関心、問題意識から生まれた企画実践②地域との協働で

プロジェクトを企画実践③地域で企画される活動への参加・支援④地域づくり考房『ゆめ』の自主事業）があり、学生たちが積極的に地域づくりにかかわっています。最近の取り組みを紹介します。

ええじゃん栄村プロジェクト 「いたどり」活用へ レシピ集を制作

8月6日に、『ええじゃん栄村』プロジェクトのメンバー11名（人間健康学部8名、総合経営学部3名）で下水内郡栄村を訪問しました。目的は、当日開館した歴史文化館「こらっせ」を訪ねて栄村の歴史文化にふれるとともに、交流を重ねてきた「ぶらり農園」代表の方に、いたどりレシピ集を手渡すためです。

「こらっせ」では2011年の長野県北部地震で被害を受けた土蔵などから運び出された、江戸時代の古文書や民具の説明を受けました。これらのなかには接待や祝言などで使用された箱膳や漆の食器が多数含まれており、学生の多くが健康栄養学科であることを知った栄村関係者から活用方法を打診される場面もありました。

山菜であるいたどりのレシピ集は、2年前のプロジェクトメンバーが「いたどりが生で出荷されているが、活用をアピールできないか」と村から相談されたことをきっかけに制作したものです。ナムルやきんぴら、シフォンケーキなどへの応用例を紹介した冊子は『イタドリ de いろいろレシピ』と名付けられ、村役場、森宮野原駅などで配布予定です。レシピを受け取ったぶらり



農園代表の齊藤勝美さんからは、道の駅などでいたどりのメニューを提案したいと感謝の言葉がありました

（地域づくり考房『ゆめ』課長 臼井 健司）

新村地区のイベントに参加 ワンバウンドふらばー バレーボールで熱戦

7月3日に開催された新村地区のイベント「ワンバウンドふらばーバレーボールオープン大会」に、『ゆめ』で活動する学生も参加しました。ワンバウンドふらばーバレーボール（以下「ふらばー」）は、変形したボールを使うバレーボール型のスポーツです。サーブ以外は、相手のコートからのボールはワンバウンドしなければならぬ、別の人により3回でボールを相手コートにかえさなければならぬなど制約があるため、バレーが得意、または若く体力があるだけでは勝てません。

5人以上でチームを作り新村地区からは10チーム、『ゆめ』からは2チームが参加しました。予選リーグは、1リーグ4チームによる総当たり戦で、上位2チームが決勝リーグに進出となります。学生チームは2つのリーグに分かれて争いました。結果的には、予選リーグ敗退でしたが本当に健闘し、ラリーが長く白熱した試合を繰り広げていました。

実は『ゆめ』の学生は、昨年負けた悔しさもあり事前に練習をし、決勝リーグをめざして頑張っていました。当日も1試合ごとに「ふらばー」に慣れ、成長していく姿に、「さすが大学生は若い!」と地区の皆さんも感心していました。



試合に勝つことだけでなく、こうした交流イベントに参加し、本気で住民とぶつかりながら楽しく1日が過ごせたと思います。来年も参加し、決勝リーグ進出をめざして欲しいと思います。

（地域づくり考房『ゆめ』運営委員長 廣瀬 豊）

『ゆめ』で活動する学生 応急・救急手当を学ぶ

6月中旬から7月上旬にかけて、地域づくり考房『ゆめ』のプロジェクトや地域連携事業に取り組む学生を対象に、本学で応急・救急手当研修会を実施しました。活動を安全に行うために必要とされる応急・救急手当を実地に学ぶもので、71名が受講しました。研修は2回に分け、1回目が応急手当の知識と対応についての講義、2回目



は心肺蘇生法についてさまざまなシナリオに基づき実習を行いました。

『ゆめ』のプログラムへの参加者の大半は

幼児、小学生です。講師の脇本澄子保健師から、子どもは成人よりも発汗の機能などが未熟なので熱中症のリスクが高いことや、ボールが軽くあたって心臓震とうを起こすケースもあると解説がありました。参加した学生からは「倒れている人がいたら勇気を出して声をかけ、周りに助けを呼ぶなど基本の心がまえを再確認できた」（4年生）などの声も聞かれ、1年生から上級生までがともに命の大切さについて学ぶ機会となりました。

（地域づくり考房『ゆめ』課長 臼井 健司）

新村ひまわりプロジェクト～地域とつくる夏の景色～

8月第一週末には松本大学の畑が、8月末には新村交差点の畑が満開となり、多くの皆さんがひまわりを見に訪れました。JA新村青年部と本学観光ホスピタリティ学科で続けてきた活動に、今年は総合経営学科の学生も加わり、新村保育園、アルピコ交通、ペーカリー麦の穂、直売所はやし屋など多くの協力を得て、猛暑の中、心温まる「ひまわり祭り」を開催することができました。また、開花前後に新村保育園と入園前の親子の「ひよこの会」とともに、復興ひまわりや種取り用のひまわりを手植えして交流と収穫を楽しみました。学生はこの企画の中核となる、いわば地域の広告代理店です。取り組みを継続することでテレビ番組の収録や新聞への掲載、来年は郵政のポストカード販売へと話が広がり、これからがまだまだ楽しみです。

(観光ホスピタリティ学科 准教授 中澤 朋代)



ジビエ料理のコツを学びました

6月16日に、健康栄養学科2年生が受講している応用調理学実習で、毎年恒例のジビエ料理講習会を開催しました。講師の藤木徳彦シェフは、フランス料理店「オーベルジュ・エスポワール」のオーナーシェフとして活躍されており、2012年には日本ジビエ振興協議会の代表に就任されています。今年は富士見町で罨により捕獲された2頭のニホンヅカを用いて、食材の扱いやジビエ料理のコツ、食肉の部位について学びました。解体においては、皮剥ぎ、脱骨、精肉と一通りの作業を順番に行いました。初めは恐る恐る手を出していた学生も、レストランスタッフの丁寧なご指導を受けるうち



に、次第に積極的に作業を進めるようになりました。その後ミンチにした鹿肉を用いて、ハンバーグステーキとミートソースを調理し、サラダ、パンとともに試食しました。受講した学生からは、「命をいただいているのだということを学んだ」、「貴重な経験となった」などの感想が寄せられました。

(健康栄養学科 准教授 石原 三妃)

ものづくりの魅力伝える6ブース出展

好天に恵まれた7月16、17日の2日間、本学を会場に「2016まつもと広域ものづくりフェア」が開かれ、延べ13,500名の来場者で賑わいました。通算で17回目、本学が会場となって7年目となる本イベントは、松本地域の子どもたちに、ものづくりや理工学に興味・関心を持ってもらうことを目的に開催され、毎年好評のものづくり体験コーナーに40種類のメニューが用意されました。

本学からは「ヤングプログラミング教室」ほか6つのコーナーを設け、小中学生を中心とした参加者が、ものづくりの楽しさや面白さを実感したようです。また、新たな試みとして「～地元の

会社を知ろう～松本広域会社ナビ」を企画し、中高生、大学生たちに地元企業をPRする機会が設けられ、こちらも大変な盛り上がりを見せていました。

将来この地域のものづくり産業を担う人材が育つことを願い、次年度も取り組みたいイベントです。

(管理課長 赤羽 雄次)



本学で日本OR学会の国際セミナー開催

「The 19th Czech-Japan Seminar on Data Analysis and Decision Making under Uncertainty」と題する国際セミナーが9月5日から7日にかけて、松本大学を会場に開催されました。

チェコからの研究者は8名、本学を含む日本各地からの参加者を含め総勢約30名の、賑やかな大会となりました。数学的な研究発表に室谷心教授が質問されたり、益山代利子教授がパルドビツェ大学との共同研

究の成果を流暢に話されましたが、「チェコの状況を誉めて貰って有難う」と恐縮される方もいました。

また、前日チェコから戻ったばかりの中田和子(元本学教員)氏が、松本とリトミッシュェル市との友好関係を育む活動を紹介されました。最終日には、浮世絵博物館や松本城を案内し、日本文化の紹介にチェコの方々は大絶賛でした。

(大会組織委員会・会長 住吉 廣行)

研究倫理の必要性を学ぶ講習会開催

8月2日に本学で、研究倫理に関する講習会「研究に『倫理』が必要なのはなぜか～哲学研究から医学研究まで～」を開催しました。教職員に加えて、大学院生・学部生の34名が参加しました。

講師は、東京大学大学院医学系研究科保健管理学の中澤米輔先生にお願いしました。講演は、「科学と倫理・哲学」「研究における公正さ」「倫理とは最低限のルールか、人を対象とした研究の倫理」の3部構成で、い

くつかの具体的事例をもとに説明いただきました。合間に演習問題を設定し、参加者との間で意見交換を行いながら進みました。

研究不正が起こらないように、研究者個人の倫理観はもとより、大学の組織的取り組みも必要であること、そのバランスをうまくとる必要があると示唆をいただきました。

(大学院健康科学研究科 教授 山田 一哉)

本学では他にも、次のような出来事がありました。

●総合経営学科3年生の井坂朱里さん、飯沼孝政さん、小沢菜緒さんの3名が、8月9日に長野市内の北信消費生活センターで開催された消費生活サポーター養成講座を受

講し、「長野県消費生活サポーター」に認定されました。

●松本市新村の西田純一さんが7月下旬、本学にお茶道具一式を寄贈してくださいました。茶道部で大切に使っています。

男子サッカー部

「松本大学ここにあり！」 長野県サッカー選手権で準優勝

8月21日、男子サッカー部は全国大会の切符をかけ、2年ぶり2度目の長野県サッカー選手権(天皇杯全日本サッカー選手権大会長野県予選)の決勝戦に臨みました。今回の対戦相手はJ3のAC長野パルセイロということで、プロチームを相手に自分たちのサッカーが通用するのかという不安もありました。その反面、選手たちからは「やっつやろう!」という強い心意気を感じられ、期待や可能性を感じながら試合当日を迎えました。

思い返せば10年前、当時は天然芝であった多目的グラウンド(現在のソフトボール部の練習場)で、4-5名の学生とボールを蹴り始めました。今だから話せますが(もう時効にしてください)、私が本学に着任した当時のサッカー部の部室はまるで「雀荘」のようで、部室の真ん中には雀卓まで置かれていたほどに、「競技スポーツ」とは縁遠い状態でした。そんな状況を乗り越え、2年後に北信越大学サッカー連盟に加盟(もちろん雀卓は部室からなくなっていました)、その後は一步一步着実に力をつけ、今年度は松本山雅FCのご協力でS級ライセンスをもつ岸野靖之監督に就任いただいたことで、チームの強化はまた一段進みました。

創部当時夢見ていた舞台に、我々は立つことができました。当日は教職員の皆様、部員のご家族、OB・OG、本学の学生諸君、さらには山雅関係者等々、多くの方々に全身全霊の応援をいただきまし



た。また、手に汗握りながらテレビ観戦(当日はEテレで生放送)していただいた方々も数多くおられたこ

AC長野パルセイロ	1	前半	1	松本大学
	0	後半	0	
	0	延前	0	
	0	延後	0	
7	PK	6		

とも聞いています。敗戦にもかかわらず、学内外からは「学生たちよく頑張ったね!」「気持ち見せてもらったよ!」という多くの賞賛もいただきました。結果はご存じのとおり、前回同様の「惜敗」でした。しかし、サッカーを通して全県に「松本大学ここにあり!」を示すことができたのではないかと思います。

我々の夢には、まだまだ続きがあります。これまで同様、今後とも温かいご声援をよろしくお願いたします。

(男子サッカー部部長兼総監督 齊藤 茂)

硬式野球部

指導体制強化し部員一丸で奮闘中

松本大学硬式野球部は、7月より総務課に着任した清野友二主事がコーチとして新たに加わり、現在、関甲新学生野球連盟の秋季リーグで奮闘中です。

本学3期生として活躍した後、2008年にベースボール・チャレンジ・リーグの新潟アルビレックス・ベースボール・クラブに入団し主力としてプレーし、主将を務めるなど、経験豊かな清野コーチの加入により、指導体制がさらに強化されました。「全力疾走」「全力発声」のスローガンの下、猛暑だった夏の厳しい練習を乗り切った選手たちは一段とたくましくなってきました。昨年からの成績不振と決別し、新しい硬式野球部の歴史を創るべく、部員一丸となり頑張っていきますので、応援宜しくお願い致します。(硬式野球部部長 白戸 洋)



女子ソフトボール部

インカレ 立命館大に雪辱ならず

第51回全日本大学ソフトボール選手権大会(以下、インカレ)が、鹿児島県南九州市知覧を舞台に8月26日から開催されました。例年32大学で覇権を争っていましたが、今年度は記念大会ということで40大学が参戦、本学は開会式直後の試合となりました。対戦相手は関西の有力校で、高校時代に全国トップレベルだった選手を数多く抱える立命館大学です。また、一昨年度も一回戦で激突し2-4で敗れている大学でもあります。



今年、本学は昨年度のレギュラーが多く残っていることもあり、春先の松井田カップ、インカレ予選、北信越オープンで優勝し、練習試合等でも強豪校に対等以上の結果を残していたことから、他校の指導者からもそれなりに評価されていました。そうした勢いで一昨年の借りを返すべく試合に臨んだのですが、0-3の完封負けと、またしても苦杯を喫する結果でした。8月に入ってから開催された東日本インカレ、白馬カップで思うような結果を残せず、多少の不安を抱えて臨んだインカレでしたが、その不安が的中する格好となってしまいました。

選手は改めて全国の壁の高さを痛感したわけですが、越えられない高さではないことも実感できており、「来年こそ」という思いをより強く感じた大会であったといえます。ここまで数多くのご声援、ご支援を賜りました。改めてお礼申し上げます。

(女子ソフトボール部部長兼監督 岩間 英明)

ラート競技部

インカレ団体2連覇を達成! 男女とも個人総合優勝!

松本大学ラート競技部は、8月27、28日に名古屋芸術大学を会場に開催された「第12回全日本学生ラート競技選手権大会」に出場し、団体が昨年に続き2回目の優勝を果たしました。この他、男女とも個人総合優勝、種目別で多数の入賞、及川輝君(スポーツ健康学科1年)が新人賞を受賞するなど、それぞれの持ち味を生かした大会成績を得ることができました。また、競技終了後、全部員で臨んだデモンストラーション演技「ライオンキングCircle of life」では、会場に感動を呼ぶ優勝「ベストパフォーマー賞」を受賞し、審判団から12月開催予定の全日本大会での再演を求められるほどでした。

2012年に創部した松本大学ラート競技部は、世界選手権で毎年入賞する力を持つ森更紗コーチに指導を仰ぎ、2014年には本学で全国大学



選手権大会を開催、昨年は同大会で伝統校の筑波大学を抑え団体優勝を勝ち取るなど、着実に力をつけてきています。また、月岡美穂さん(スポーツ健康学科4年)は6月にアメリカのシンシナティで開催された「第12回世界ラート競技選手権大会」に日本代表として出場し、世界の大舞台上で跳躍種目9位という快挙を成し遂げました。

上級生がのこした功績と意気を、後輩たちがしっかりと引き継ぎ、またさらなる活躍を見せてくれることに期待したいと思います。

(ラート競技部顧問 犬飼 己紀子)

陸上競技部

日本インカレで力走!

9月2日~4日までの3日間、埼玉県熊谷市で「第85回日本学生陸上競技対校選手権大会(通称:日本インカレ)」が行われ、本学陸上競技部から3名の選手が出場しました。どの種目もハイレベルな争いのため、3選手とも上位争いに絡めなかったのは残念でしたが、種目によっては今夏のリオ五輪代表選手も顔を揃え、「大学日本一」を決める大会に相応しい熱戦が繰り広げられました。

また、これに先立ち7月上旬に北海道札幌市で行われた「第38回北日本学生陸上競技対校選手権大会」(北信越、東北、北海道の3学連が対象)では、男子400mの優勝を始め、2位3種目、3位3種目など過去最高の成績を収めました。

(陸上競技部顧問 白澤 聖樹)

【陸上競技部】主な大会結果

◇第85回日本学生陸上競技対校選手権大会

- ・男子400m 浦野 泰希(観光ホスピタリティ学科4年) 予選2組9着 48秒06(予選敗退)
- ・男子400mH 清水 泰志(観光ホスピタリティ学科4年) 予選3組8着 55秒64(予選敗退)
- ・女子七種競技 中澤 久美(スポーツ健康学科4年) 決勝18位 4138点

◇第38回北日本学生陸上競技対校選手権大会(3位まで)

- ・男子400m 浦野 泰希 優勝 48秒48
- ・女子400m 村松 広捺(健康栄養学科3年) 2位 56秒89
- ・女子400m 長村 紋(観光ホスピタリティ学科4年) 3位 58秒00
- ・女子400mH 南澤 明音(観光ホスピタリティ学科1年) 3位 1分05秒25
- ・女子400mR 長村 紋・村松 広捺 萩原 楓(スポーツ健康学科2年) 南澤 明音 3位 50秒26
- ・女子1600mR 長村 紋・村松 広捺 萩原 楓・南澤 明音 2位 3分58秒21
- ・女子七種競技 中澤 久美 2位 3983点

注)Hはハードル、Rはリレーの略

ガンバった! 全国私立短大体育大会



8月8日~11日、全国私立短大体育大会が東京近郊で開催され、松商短大の体育系サークルにとっても熱い夏となりました。女子バレーボール、女子バドミントン、女子バスケットボール、男子卓球の各競技に出場しました。女子バドミントンのシングルスでは第3位というすばらしい結果となりました。その他は表彰台には乗れませんでした。少しずつ戦況を紹介します。

女子バレーボールでは決勝トーナメントに進んで粘りを見せるも敗退。女子バスケットボールは接戦を勝ち抜いたと思ったら、次は強豪と当たって粘りを見せるも敗退。男子卓球シングルスではひとつ勝利するも、次は優勝候補の選手に敗退。短大生同士とはいえ、勝つのは難しいものでした。

今年は、教育学部棟の工事のため十分な練習ができなかったかもしれませんが、それでも1年生に部活動をアピールし、部員を確保して頑張る練習していました。勝敗も大事ですが、頑張る練習したことを誇りにしてもらいたいです。

(短期大学部 学生委員 川島 均)

柔道同好会

全国大会で健闘!

9月10、11日に埼玉県で開催されたJOCジュニアオリンピックカップ平成28年度全日本ジュニア柔道体重別選手権大会に、半戸大樹君(総合経営学科1年)が60kg級で出場しました。トーナメント1回戦で優勝候補の選手と対戦し惜しくも敗退という結果でしたが、全国の舞台上で勇敢に戦う姿を見せてくれました。今後の活躍に期待したいと思います。

(柔道同好会顧問 丸山 正樹)

美しいチロルで

観光ホスピタリティ学科・准教授 八木 雅子

信州は美しい山国で、その魅力にひかれ国内外から観光客が訪れています。私も山歩きを楽しむ一人です。信州にとどまらずイタリア、オーストリアなどにも足を伸ばし28年になります。お気に入りには、ドロミテ、イタリア北東部、オーストリアとの国境地帯の南チロルの一部です。2~3,000m級の山々が連なり、最高峰はグロスグロックナー、3,798mです。世界自然遺産にも登録されています。雄大なドロミテの岩山を見上げながら歩くと、飲み込まれてしまうような感覚に包まれます。また夕日に照らされると山肌は息をのむほど美しい茜色に

染まります。険しい岩肌を登ると、山の反対側には牧草が広がり、登りで疲れた足も、のどかに草を食む牛の横をゆっくりと、可憐な花や小川の流れを楽しみ、そして牛たちの落とし物にパワーをもらっての下りとなります。登る時も下る時も行き交う人たちは互いに「ハロー」、「ボンジョルノ」、「グリュスゴット」などと挨拶を交わします。

日本では山に犬を連れ込むことは禁じられていますが、犬を連れて山登りをする人も多く見かけます。彼らにとって犬はペット以上の家族です。その違いは何処にあるのでしょうか。自然保護の考え方に違いがあ

り、また犬が飼い主と一緒に行動するための訓練が徹底されているからでしょうか。

ゴンドラで途中まで登り、そこで展望と食事を楽しむ人もいれば、更にその先の高みに挑戦する人もいます。これより先、危険立ち入り禁止等と言うこともありません。年齢、体力に合わせて安全に山歩きを楽しむコースが国レベルで整備されています。日本が観光立国としての道を進むうえに、参考にするのはまだまだあるのではないかと考えます。

Information

ご相談内容は何でもOK! 入試相談会

【日時】 10/15^土 大学祭| 梓乃森祭 同時開催 11/23^水
2017年 1/19^木・20^金 10:00~15:00

【開催場所】 松本大学 ※送迎バスは運行しませんので、ご注意ください。

個別相談



授業の内容や雰囲気を確認するチャンス! 高校生のための公開授業

【日時】 10/10^日 9:30~16:50

【内容】 総合経営 マクロ経済学 栄養 食事摂取基準論 短大 サービスマーケティング
観光 観光産業論 スポーツ 体力測定と評価 など ※各学部10~20の授業を公開します。



無料シャトルバス運行 松本駅アルプス口からのみとなります。予約不要

行き▶ ①9:00発 ②10:00発 ③11:00発 ④13:00発 ⑤14:00発
帰り▶ ①13:30発 ②15:00発 ③16:00発 ④17:00発

詳しくはホームページでご確認いただくか、入試広報室までお問い合わせください。

ホームページ www.matsumoto-u.ac.jp TEL 0120-507-200

高等学校関係の皆様へ

松本大学では、高校生のための進路講話やキャリア講座、大学・短大系統別説明、学部学科説明、推薦入試対策講座・面接対策講座、保護者向け進路説明など、進路に関わるさまざまな出張講座を無料で行っております。キャンパス見学も随時受け付けておりますのでお気軽にご相談ください。

※学食での昼食対応やバスでの送迎もご相談に応じます。

詳しくは入試広報室 0263-48-7201 (入試広報室直通)までお問い合わせください。

第50回松本大学大学祭 『梓乃森祭』

【一般公開】
10/15^土・10/16^日
10:00~

【テーマ】
50 OVER THE LIMIT
~限界を超えろ!!~



■東京大学名誉教授 姜 尚中(カン・サンジュン)氏 講演会
「悩む力・心の力」

10月16日(日) 14:00~15:30
※事前申込み ※入場無料

■小布施様が、和カフェのためにオリジナル和菓子を提供
和(なごみ)カフェ with Obusedo

10月16日(日) 10:00~15:00
フォレストホール2F

■第7回 松本大学 地域貢献大賞選考会

10月16日(日) 13:00~

■打ち上げ花火&キャンドルナイト

10月16日(日) 開始19:30(予定)

■お笑いライブ in ウッドデッキ

10月16日(日) 11:00~

ウッドデッキステージ(野外ステージ)

※入場無料

※その他 ゼミ発表、各種イベント、模擬店など多彩な催しで皆さまのお越しをお待ちしています。詳しくはHPをご参照ください。

編集後記

前期試験が終わり夏季休暇に入ったと思ったら、早くも後期が始まろうとしています。10月に入るとすぐに、第50回目となる大学祭「梓乃森祭」が行われます。記念の大学祭を盛り上げるために、学生だけでなく教職員も一丸となって取り組んでおります。

さて、今号は設置認可がおりた教育学部と短大が選定された文部科学省大学教育再生加速プログラム(AP:アクセラレーション・プログラム)に加えて、様々な大学活動の記事が満載です。本当に暑い夏でしたが、松本大学、ますます元気です。

(記・広報委員長 山田 一哉)

